

## 維新派分子における廣學會宣教師への友情と信賴

若 杉 邦 子

### はじめに

清末維新派の人士達は、當時の知識人一般の例に漏れず、西學書や西洋人達の影響を強く蒙り、その結果、早急なる改革の必要性にいち早く目覺めた人々であつた。なかならず、彼らが深い關心を寄せ、倦まず弛まず交流と吸収とに努めた「學習」の対象とは、清末に上海で結成された西洋人宣教師達の出版機構「廣學會」と、その機關誌『萬國公報』をはじめとする、同會の刊行に係る夥しい數の西學書籍群であつた。

廣學會という機構自體、あるいは『萬國公報』やその他の西學書籍群が、維新派に對して及ぼしたとされる著しい影響に關しては、すでに先學諸氏によつてしばしば論じられてきたとおりである。また、筆者自身も以前に、拙稿「資料紹介『（北京）萬國公報』——清末維新派の發行した最初の雜誌——」（『中國文學論集』第二十五號 一四二—一四九頁 九州大學中國文學會、一九九六年十二月）および「戊戌變法運動の草創期における維新派と廣學會——維新派の發行した『（北京）萬國公報』を中心に——」（『東方學』第九十六輯、一三三—一四八頁、東方學會、一九九八年七月）の中で、當該問題について若干の考察を試みたことがある。従つて、本稿では再度に及ぶ細説を避けたいと考えるが、しかし、基本的には前掲の兩稿中で得られた結論を手がかりとしながら、維新派と廣學會の間における微妙な關係の一端を闡明していきたく思う。そのため、今回は特に兩者の間の「友情」と「信賴」という問題に注目し、中國側と西洋側の兩史料を比較検討してみたい。

### 一、問題の所在——史料の信憑性について——

維新派分子における西學、あるいは西洋人への對應をめぐつては、様々な疑問點がこれまでに指摘されてきた。中でも、最もよく問題とされたのは、維新派が西學や西洋人について言及する際に、しばしば虛言を弄し、事實を故意に歪曲したことである。①それゆえ、維新派の言葉をそのまま信用するわけにはいかなくなり、いたずらに多くの謎が残され

る結果に陥ってしまった。一方で、西洋人側、とりわけ廣學會などは、かなりの正確さが期待できる記録をある程度まとめた分量でもって残しているもので、こちらは検討の際には非常に有用である。<sup>(2)</sup>しかしながら、そこに記されている内容があまりにも維新派のものと食い違っている場合には、信憑性を再確認する必要性が新たに生じてくるため、やはりそれを不用意に取り扱うことはできない。<sup>(3)</sup>

そして今、本稿が提起しようとする「維新派分子における廣學會宣教師への友情と信頼」の有無をめぐる問題にしても、かかる史料の取り扱い上の困難さゆえに生じたものだと言つてよい。廣學會の年度報告書や、李提摩太の著書『留華四十五年記』等の宣教師史料を翻いてみれば、その中身はまさしく、廣學會と維新派の間に「友情」や「信頼」等の好意的な關係が成立していたことを主張する記述で溢れかえっている。<sup>(4)</sup>しかしそうした一方で、維新派側の史料を見てみるに、それらを否定しようとする内容によって大部分が塗り固められている。要するに、維新派側が主張する兩者の關係と、廣學會側の主張するそれとは、完全に相反した形象を呈示しているのである。

そこで筆者は、考察に客觀性を持たせる爲に、雙方の史料を比較しつつ検討を進めていきたいと考える。また、本稿の狙いは兩者間の「友情」や「信頼」の存在を確認していくことにあるので、論述の際の主たる根據については、敢えてこれを（「友情」や「信頼」の存在を否認する）維新派側の記述の方に求め、中・西雙方の史料の内容が一致する點を見出していきたい。

さて、では兩者間の「友情」や「信頼」の存在については、從來如何なる見解が示されてきたであろうか。但し、この件について述べ始める前に、まずはその前提となる根本的な認識の有り様の方から明らかにしておく必要があるようだ。廣學會と維新派の關係に対する一般的な理解の在り方を俯瞰する時、そこにはある顯著な傾向を認めうる。それはすなわち、従前の少なからぬ研究が、廣學會と維新派の間の繋がりを「侵略者」對「被侵略者」という單純な二元論のみでもって把握しがちであったということだ。そして、そうした見方が何の疑問も抱かれぬまま廣く行われてきた結果、兩者の關係は専ら功利論に則つて捉えていかれる運びとなった。以下にそうした觀點に基づく敘述の例を一つ示しておく。

變法運動のいま一つの推進力はキリスト教宣教師と中國に居留する歐米商人であつた。彼らは滿清政治が少し改められて、商業を擴大し、布教を推進するのに都合のよいようになり、帝國主義の中國侵略の目的を完成しようと願つて

いた。③

言うまでもなく、かかる「侵略者」對「被侵略者」という單一の構圖の下には、廣學會と維新派の「友情」や「信賴」を積極的に認定しようとする視點など、自然發生的に生じてくるはずもなかったのである（もちろん宣教師史料の方を主軸とする研究の場合はこの限りではない）。

ところで、「（維新派への）布教を目的とする廣學會」對「（廣學會の）西學知識を必要とする維新派」↓「雙方による協力と連攜」という、非常に明確な基本構造がその根底部分にあった以上、兩組織の本源的な連結力は確かにその功利性に大きく負っていたであろう。本稿にしてもその點について異論を唱えるものでは決してない。しかしながら、兩者における關係をあまりにも單純に「侵略者」對「被侵略者」という枠組みの中に當て嵌め、功利論のみでもって總括しているとする姿勢に對しては首肯しがたいものを感じる。それと言うのも、今、維新派側と廣學會側の各史料を仔細に検討してみるに、功利性という理由付けのみによつては、どうにも説明のつかない不可解なケース—すなわち、半殖民地狀態下の中國において、極めて友好的で緊密な人間關係が、中・西兩人の間に成立していたと思しき形跡—に、雙方の文獻中ではしばしば遭遇するが爲である。

そこで小論は、この様な「友情」や「信賴」に基づく維新派と廣學會の間の好意的關係に對して光を照射し、以つて兩者間における隠された交流の實態に些少なりとも迫つてみようとするものである。

## 二、維新派側の史料に見る西洋人への嫌惡感

さて、上述の「侵略者」對「被侵略者」という構圖であるが、こうした見方が形成されるに至つたのは、清末當時の半植民地的な社會狀況に鑑みれば、蓋し當然の成り行きであつたと言えよう。そしてまた、維新派の残した少なからぬ「西洋人を攻撃する文章」が、上述の如き解釋の方向性をさらに強固なものとするべく、力を貸してきた點については言を俟たない。例えば今、梁啓超の『變法通議』（光緒二十二年、一八九六年）を採り上げてみても、侵略者達に對する激烈な口調をそこに容易く見出しうるのである。

夫以西人而任中國之事、其愛中國與愛其國也、孰愈、夫人而知之矣。（そもそも西洋人に中國のことを任せると言うが、

彼らが中國と自分の國とのどちらを強く愛しているかなど明白であり、夫人ですら知るところである。)(6)

若變科學也、興學校也、改官制也、興工藝開機器廠也、獎農事也、拓商務也、吾未見西人之爲吾一言也。……(科學を變えるにせよ、學校を興すにせよ、官制を改めるにせよ、工藝を興し機械工廠を開くにせよ、農業を獎めるにせよ、商務を拓くにせよ、私は今までに西洋人が我々中國のために助言するのを見たことがない。……)(7)

そして梁啓超による鋭い非難の矛先は、西洋人達に對してのみならず、やがてはふがいないおのれの同胞達に對しても「自立を促す」という形で向けられることと相成った。

夫當急則治標之時、吾固非謂西人之必不當用、雖然則烏可以久也。……今中國之言變法、亦既數十年、而猶然借材異地、乃能圖成、其可恥孰甚也！(今はまさに應急處置を施さねばならない時であるから、私はもとより西洋人を絶対に用いるべきではないと言っているのではない。とはいえ、彼らを長く使うべきではないが。……中國が變法を言いはじめてから、もう既に數十年にもなるうかというのに、なおかつ人材を外國に借り、やつとのことで自らの成功を期しうるとは、極めて恥ずべきことではないか！)(8)

斯様な、帝國主義者達に對する滿腔の嫌惡感をまさに「體現する」維新派人士達の痛烈な筆致が、とりもおさず、兩者間の交流の理由を功利性のみに限定する強力な要因となってきたことは疑いを容れないであろう。

ところで、確認の爲にここで敢えて再び繰り返すならば、「侵略する側とされる側」を(今見てきた通りの史料内容等も踏まえつつ)功利的關係論に準じて捉えていこうとする從來の解釋の方向性とは、基本的には間違つたものではなかつたはずだ。しかしながら、こと本稿が扱っているこのケースに關して言えば、如上の解釋方法だけでは未だ不完全であると考えられ、筆者が今回、特に取り上げたと思うのは、まさにその不足する部分に絡む問題なのである。

その補完すべき不足部分とは、すなわち、憎むべき対象とされた西洋人の中にも、「愛すべき」と目された人物が、若干数ながらまた別個に存在したのではないか……という「例外的」事態を考慮する第二の視點に他ならない。そして、かかる例外的人物の代表格としては、廣學會督辦(Secretary)の李提摩太(Richard Timothy)や、あるいは同じく同會に所屬していた李佳白(Reid Gilber)等の宣教師達を挙げうるものと考ええる。

そこで次章では、維新派側の史料の中に、今述べたところの「例外的」事例を實際に確認し、その少數の「例外」の持

つ極めて重要な意味について論じてみたい。

### 三、維新派側の史料に見る一部西洋人への「例外的」友情と信頼

前々章においても少しく觸れたが、今、維新派側の史料を眺めてみるに、兩者の間には「憎惡」とは完全に性質を異にする「友好的關係」が、例外的にはあるが成立していたようである。然りながら、「兩者はそもそも敵同士である」との常識めいた先入観が持たれがちであつた上に、畢竟、そうした「例外的」な友情を示す記載というものは、維新派側史料の全體から見れば極めて部分的な存在でしかなく、しかも維新派分子達の西洋人一般に對する激烈な非難の語氣によつて半ば覆ひ隠されてしまつていた爲、特に意識されることがなかつたのであらう。例えば、前掲の『變法通議』においても、先入観を伴わずに讀んでいくならば、以下の如き興味深い記述に時として出合うのである。

惘乎！英士李提摩太之言也。曰、西官之爲中國謀者、實以保護本國之權利耳。……又曰西人之見華官、每以諛詞獻媚。曰、貴國學問、實爲各國之首、以驕其自以爲是之心、而堅其藐視新學之志、必使無以自強而後已。今夫李君、亦西人也。其必非爲謫言以汗巖西人、無可疑也。而其言若此、吾欲我政府有司之與西人酬酢者、一審此言也。（ああ！イギリス人のティモシー・リチャードは次のように言つてゐる、「西洋の官吏で中國の爲に策を練つてゐる者は、その實、本國の利益を保護する爲にのみそうしてゐるのである。……」と。また「西洋人は中國の役人に會うといつても媚びへつらい、あなたさまのお國の學問は本當に世界各國に冠たるものでございます」とおべつかを言い、自國に對する自惚れを抱かせ、新學をさげすむ心を固めさせ、必ずや自強させないようにしてから後、やつとそれをやめる」とも言つた。今、ティモシー・リチャード氏もまた西洋人であるから、彼が決して出鱈目を言つて西洋人を侮辱してゐるのでないことは疑いが無い。しかしその言葉がこのようなのであるから、私はわが中國の政府や官吏で、西洋人と交流する者には、この言葉についてじっくりと考えてみて欲しい。）」

こうした引用部分からも確かに、梁啓超の李提摩太に對する、ある種別格とも稱するに足る信頼感の存在が感得される。『し』ちなみに、李提摩太については翁同龢も「豪傑だ、説客だ」「彼の言葉は誠實眞摯だ」と絶賛し、その學識のみならず、人格をも高く評價していた點が窺えるのである。（『し』）

康有爲に至つては、政變後、逃亡先の香港で『中國郵報』の記者のインタビュに答えて次の如く語つたという。我接到詔書之後、立即與我的同僚們會商、盡我們的力量去做。我找到了美國傳教士李提摩太、請他馬上去找英國公

使。……李提摩太先生本來請我住在他家裏暫避、但我接到皇帝の上諭、叫我到外洋去、因此我想最好還是離開北京。

……我想李提摩太先生一定到英使館去過了、因此上海的英國領事奉命在等候和尋覓我。(私は(光緒帝から)詔書を頂戴した後(一八九八年九月十六日、九月十七日)、すぐに私の同僚達と會つて相談し、私達の力を盡くして(その内容を)實行しました。私はアメリカ人宣教師(\*イギリス人の誤り)の李提摩太氏を捜し出し、すぐにイギリス公使を訪問して下さるよう頼みました。……李提摩太先生はそもそも私に、御自分の家に宿泊し、暫くの間、難を避けるようにと言つて下さったのですが、私は、私を出洋させるという皇帝の詔敕を賜つていましたので、最も良いのはやはり北京を離れることだと思いました。……私は、李提摩太先生はきつとイギリス公使館へ行つて下さったのだと思います。ですから、上海のイギリス領事は命を奉じて私を待ち受け、捜していたのでありましょう。)(12)

ここに、李提摩太に對する康有爲の深い信頼感が滲出していると見ることに、些かの問題も無いであらう。そしてまたちようどその頃、康有爲は李提摩太に宛てて以下の如き内容の手紙をも出していたようだ。

自從我們九月十九日會談後、我便南來了。我想你一定還記得、那天我們所談的朝政概況和如何計劃安全地窩藏我、不料在幾天之內、竟發生了一件意外之變。在九月十八日那天、我曾上了一封密摺給皇上、請他委你做顧問、藉以保障他的安全、沒想到變化這樣快、使他竟來不及照辦。(私達は九月十九日に會つて話を致しましたが、その後、私はすぐに南に参りました。あの日私達が語り合いました、朝政の概況や、あなたが如何にして私を安全にかくまうべく計劃していられしやうかといった内容につきまして、あなたはきつとまだ憶えていらつしやることと思います。しかしながら、はからずも數日の内に、ついに、思いもよらぬ政變が発生してしまいました。九月十八日に、私は一通の機密文書をひそかに皇帝に奏上し、あなたを顧問とし、そうすることによつて皇帝御自身の安全を保障するようお願いしたのですが、變化がこれ程にも早かつた爲、皇帝に、そのとおりにして頂くことはとうとう間に合いませんでした。)(13)

康有爲が李提摩太を頼みにし續けた理由の一つとして「彼が有力な外國人であつたから」という事實が存在したことは、大きな要因としてもちろん考慮されねばならないであらう。しかしそれにしても、自らの生命がかかつている極めて重大な事態の前後に、これほどまでに信頼し、依據出來た相手となると、やはりそこには、敵・味方の次元をすでに超越した眞の友人關係が成立していたとする別解でも設けられていない限り、合理的に解釋することは甚だ困難である。

さて、さらにあと一名ばかり同様のケースを提示しておくとなれば、それに相應しい人物としては、前章の末尾でその

名に言及した李佳白などを擧げ得よう。李佳白に對しても、梁啓超は『記尙賢堂』（一八九七年六月三十日）の中で、次のような賛辭を寄せている。

中國應舉之事千萬也。中國人不自舉，於是西人之旅中國者，傷之憫之，越俎而代之。李君游中國十餘年矣。昔在強學會習與余相見。……其愛我華人亦至矣。詩曰：無此疆爾界，李君之賢也。又曰：不自爲政，抑亦中國之羞也。（中國にはなすべき事が非常に多い。しかし中國人が自ら手を着けないので、中國を旅する西洋人が、これを憐れみ、代わりに世話をやっている。李君は中國に滞在なさることが十年餘りにもなる。以前、強學會で私はよくお目にかかったものだ。……その、我々中國人への愛情もまたこの上なく深い。詩に曰く「彼我の境界など無き、李君の賢明さよ」と。また「自分で政治をしなければ、それは中國の恥である」ともおっしゃった。）（一六）

この『記尙賢堂』という文章は、そもそも梁啓超が李佳白に請われて個人的に著したものであったが、その後『時務報』の第三十一冊（一八九七年六月三十日）に掲載され、廣く中國知識人達の目に觸れるところとなった。該文がもしも單なる追従の爲の美言でしかなかったとしたら、梁啓超としてもこれをわざわざ『時務報』に載せ、衆人に讀ませたりはしなかったであろう。してみればここにはやはり、梁啓超なりに伝えたいとする重大なメッセージが込められていたと見るべきであり、また、李佳白に對する梁啓超の純粹な好意にしても敢えて疑つてみる必要などは無いように思われる。

というわけで、以上に、維新派側から見て「愛すべき」存在であつたと推定される「例外的」西洋人として、李提摩太と李佳白という兩人の名前を提起してみた。（一七）

ところで、維新派と廣學會における交流は、いったい如何様な形態の下に行われていたのであるか。今、廣學會側の史料にその答えを求めてみるに、次のような記録があるようだ。

There has never been any organic connection between our Society and the Reformers of any party, but they were convinced, like many of those who were Conservatives before, that our Society wisd well to China and that China was only to be saved on the general lines advocated by us. (我々廣學會と維新派の間には、どのグループにおいても何ら組織的な繋がりには存在しなかったが、しかし維新派は、多くの、以前には保守派であつた者達と同様に、我が會が中國によく知をもたらし、また、中國は我々の主張する一般的路綫によつてのみ救われると確信するようになった。)（一八）

上記の内容を信用するとすれば、維新派と廣學會の間には組織的な繋がりはなく、存在したのはあくまでも個人個人、または少人数單位のプライベートな交流であつたことになる。つまり、維新派分子と廣學會の宣教師たちとの交際も、會全體の方針というよりはむしろ、そうした個別の、小規模なものであつたというふうに推測されるのである。だとすれば、維新派分子と李提摩太、または李佳白の間における交流も、實際はそうした、個人的な性質のものに過ぎなかつたと解釋すべきであらうし、また、そうであつたと思しき以上、本稿が指摘する兩者の間の緊密な關係については、組織・對組織のレベルにまで單純に敷衍して考えない方が、今はやはり無難であるかもしれない。<sup>(17)</sup>

しかしながらここで一點、注意しておかねばならないのは、上に挙げた兩名はいずれも廣學會を代表する、所謂「看板」的名士だつたという事實である。李提摩太は一八九一年の十月、四十六歳の時に廣學會の實質的最高責任者(督辦)に就任して以來、(一八九四年から一八九八年の間を除き)一九一六年の五月に退職して歸國するまで、約二十五年もの長きにわたつて變わらず該職を奉じ続け、「李提摩太はすなわち廣學會そのものだ」とまで稱された人物である。<sup>(18)</sup>また李佳白の方も、一八九四年に一度、その督辦の職を務めたことがあつた。<sup>(19)</sup>つまり、彼らは兩人ともに、中國人達の信用を勝ち取り得たという、極めて例外的な立場に屬する少数者であつたにもかかわらず、一方で、その個人的な活動が即そのまま「廣學會の方針」だとして了解されるほどに、認知度や信頼度が高いメジャーな人間達であつたのだ。

思うに、この事實は非常に重要な意味を持つであらう。なぜならば、維新派の分子達が、一般に西洋人を憎み、帝國主義列強に對しても常に公然と強硬かつシニカルな態度と姿勢とを表明し續けたとしても、一方で、「廣學會そのもの」であるとかえ認識されていた同會の一部のリーダー達を、個人的に尊敬し信頼し、彼らと親密に往來していたとしたら、客觀的に見てその状況とは、廣學會と維新派の兩組織による「極めて密接な合作活動」と呼ぶべきものに他ならなかつたと判じられる爲である。そして、この點を念頭に置いて當時の歴史を振り返る時、はじめて納得のいく事柄は實のところ少なくない。例えば、戊戌政變の前に、僧侶達に賄賂をおくられた宦官が、西太后に向かって「光緒帝はすでにキリスト教に改宗した」と讒言した<sup>(20)</sup>とされるエピソードにしても、また、廣學會史料の中に同會と維新派との間の友情や信頼に關する記録が満載されている状況にしても、みなこれに相當するものである(廣學會の宣教師達にしてみれば、維新派によつて極めて親しく、また度々熱心に働きかけられたならば、自分達の組織と維新派とにおける心情的な一致を當然信じ



て疑わなかつたであらう)。

いずれにせよ、維新派と廣學會との關係に對して、斯様な前提でもって改めて理解に臨むならば、まずは「當時の中國を取り巻いていた苛烈な半植民地的社會狀況を踏まえ」た上で、次に、「維新派によるあからさまな憎惡の吐露に納得」し、最後に、廣學會の史料中に多出する「中・西兩人の間の『友情』と『信頼』の記録を事實として受容」する……という具合に、一連の曲折した過程を矛盾なく繋げて理解することがいきおい可能となる。確かに維新派は數多の事柄を捏造し歪曲した張本人であるし、また、廣學會の側にも信用のおけない部分は多少なりともあつたかもしれないが、しかしながら、當該問題に關して言えば、明確な根據を缺いている以上、維新派か廣學會のどちらかに、捏造あるいは曲解の罪を殊更に着せることもできないのである。

さてここで、上述の内容を一旦まとめておきたい。維新派の人士達は總じてやはり、彼らの著した文章が雄辯に語るが如く、西洋人を、また帝國主義列強を、中國人としてのアイデンティティーにおいて憎惡していたに違いない。然りとてかかる一方で、一部の西洋人達に對しては例外的に、その學識と人格とを尊敬し、彼らに深い友情と信頼とを寄せ、結果的には教授を請うて個別に交際するという行爲に及んでいたのであらう。そして、その西洋人達というのが李提摩太や李佳白といった、廣學會を代表する名士達であつた爲、ここにおいて自然と、維新派と廣學會とは所謂組織的な協力關係にあると一般的に見なされるに至つたのではあるまいか。

#### おわりに

ところで興味深いことに、先程引用した『變法通議』や『記尙賢堂』の中に見られる梁啓超の言葉を吟味してみると、そこから「中國人に自立を呼びかける李提摩太と李佳白(ならびに梁啓超自身)」の姿が浮かび上がってくる。ちなみにこの、「中國人に自立を呼びかける西洋人像」というのが、實は「西洋人に依存しようとする中國人像」と表裏一體の關係にある點については贅言を要さないであらう。すなわちここからは、次の如き事情が讀み取れるのである――つまり、維新派と廣學會の領袖達の間においては、「中國人に自立を促」し、かつ、「西洋人に依存しようとする中國人達の爲に警鐘を鳴らすべきである」との共通認識が(あるいは西洋人の教導の結果として)出來上がつていた、ということである。

そして斯様な状況は、維新派が北京で初めての雑誌を創刊した際に、廣學會に依存するべく、その誌名を同會の機關誌と完全に同名の『萬國公報』とし、該誌を北京の士大夫達に遍く配布した（後に李提摩太の建議により、『萬國公報』という誌名は『中外紀聞』へと變更された）、というエピソードとも恰度うまく重なっているようだ。（2）

してみれば尙更のこと、維新派と廣學會との關係を見ていく際に、立論の際の絶對的な前提條件として兩者間における憎惡の存在や功利的關係論を第一に据え、一切の「例外」的事例を考慮しないというのは、甚だ危険な判斷だと言えるのはあるまいか。それよりもむしろ、兩者の間にあつては、「個人的な連繫」というベース上に「自立を促される側―促す側」「依存する側―される側」という關係が構築されていたと見る方が自然であり、またそうした状況に鑑みれば、當事者間には極めて友好的な感情が通ひ合つていたと推測することすら可能であるように思われる。

もしも廣學會の人士達が常に中國人に向かつて、中でもとりわけ維新派のメンバーに對して、事あるごとに西洋人達への依存を戒め、「自立」を促していたのだとすれば、變法維新運動の實態とは、從來抱かれてきた維新派の「獨立獨行」のイメージや、或いはその運動自體の「主體的」な印象からは、随分と懸け離れたものであつたということになるろう。この、變法維新運動における自律性や主體性等の問題については、別稿で詳しく論じたい。

### （注）

- （1）この點に關して、例えば原田正巳氏は「梁啓超の『西學』に對する態度も甚だ奇異なところがある。……『大同書』その他の著作には西人の説をあげるのに梁啓超はなぜ、こう批評したのか、まことに解し難いが、これも『西學』よりも『中學』を重視する梁啓超の態度とかかわりがある。」（『康有爲の思想運動と民衆』序篇 第二章「清末思想運動の『西學』受容の一面」五八―五九頁、刀水書房、一九八三年五月）と述べておられる。

- （2）拙稿「戊戌變法運動の草創期における維新派と廣學會―維新派の發行した『（北京）萬國公報』を中心に―」（『東方學』第九十六輯、二三三―一四八頁、東方學會、一九九八年七月）を参照のこと。

- （3）しかし今までは、この兩者間の極端な矛盾を一旦放置した上で、さしあたり必要な史料を任意に使用するという方法が採られてきた。また、問題は他にも存在する。例えば、西洋側の文獻のうち、宣教師史料と言われるものには、本國の教會本部に向

けての報告書が含まれているケースがあり、かかる性質のものにおいては些か恣意的に記事の内容が操作されている可能性が考えられる。さらには、記録者が外国人であるということのために、文化や発想、あるいは立場の違いから生じる誤解にも避けられない面がある。特に、植民地政策が敷かれている土地においては、入植者（侵略者）側である外国人に對して、被侵略者側はなかなか眞意を見せたりはしないものである。そのため、誤謬を招来する危険性がなおさら高くなるという深刻な事態の出現も懸念される。

(4) 廣學會資料に散見する兩者間の「友情」の記録とは、例えば以下の通り。

The hopeful signs in the Reform Movement were that it recognized that the old hatred of foreigners was unjustifiable, and that their friendship should be cultivated; that the ancient education of China was all too inadequate to meet modern requirements, and the Western learning should be adopted. Some Reformers even went so far as to say that Confucianism was too material, and they boldly advocated the adoption of Christianity as the national religion. (李提摩太「留華四十五年記」T. Fisher Unwin Ltd. London 一九一六年、二六一頁)

(維新運動における最も希望に満ちた現象とは、次のような點が認識されたことである：すなわち、以前の外國人に對する憎惡は不條理なものであり、彼らの間の友情は育まれるべきだということや、中國の古代の學問は現代の必要性に全く適合しないものであり、西洋の學問こそが採用されるべきだ、といった事柄である。維新論者の中には、儒教はあまりにも物質的だと言ふ者も居り、彼らは大膽にも國教としてキリスト教を採用するよう主張した。)

(5) 范文瀾『中國近代史』横松宗・小袋正也譯、第七章「第一次改良主義運動—戊戌變法」第二節、三八六頁、中國書店、一九九九年七月

(6) 梁啓超『變法通議二 論變法不知本原之害』（『時務報』第三冊、光緒二十二年、一八九六年八月二十九日）

(7) 梁啓超『變法通議二 論變法不知本原之害』（『飲冰室文集』第一冊）

(8) 同註（6）

(9) 同註（7）

(10) また梁は同じく『變法通議 論譯書』の中で「李提摩太謂、中國欲開地利、苟參用西法、則民間所入、可驟增一倍、補益可謂極大矣。」とも述べる。

(11) 翁同龢『翁文恭日記』（臺灣商務印書館、一九七三年）には以下のようにある。

（光緒廿一年九月）九日、…午正、赴總署。未初晤英教士李提摩太、豪傑也、說客也。（光緒廿二年正月）十二日、…未刻送

- (12) 英教士李提摩太、長談。伊言須富民富官、歸於學人要通各國政治、其言切摯、贈以食物八匣、袖四端而別。留一照像贈余。  
「中國的危機（康有爲の談話）」『中國郵報』より轉載、『字林西報週刊』十月七日號掲載（中國近代史資料叢刊『戊戌變法』第三卷所收、五一—五二頁、中國史學會主編、上海人民出版社、上海書店出版社、二〇〇〇年）
- (13) 「康有爲致李提摩太書（一八九八年九月二十五日）」、同註(12)『戊戌變法』第三卷、五二八頁。また梁啓超も同年十月一日（西曆十一月十四日）付で李提摩太に感謝の手紙を出したという（同註(12)四一七頁）。
- (14) 梁啓超『記尚賢堂』（一八九七年六月三十日）（『時務報』第三十一冊）
- (15) むろん、「愛すべき」西洋人はこの兩者のみに止まらず、他にも林樂知（Allen Young John）、傅蘭雅（Frederick John）、慕維廉（Muirhead, William）等、若干の宣教師達がこれに該當したかもしれないが、未だ詳しい考證を經ていないのでここでは一旦措くこととする。なお、李提摩太の『留華四十五年記』（二五五頁）にも、維新派が李提摩太と李佳白を頻繁に食事會に招待し、中國の維新について共に議論していたとの記録が見える。
- (16) 『Fifth Annual Report of the C. L. S., 1898（第十一次廣學會年度報告書）』
- (17) 『Fifth Annual Report of the C. L. S., 1898（第十一次廣學會年度報告書）』によれば、一八九八年の始めに光緒帝が注文した百二十九種の書籍のうち、八十九種が廣學會の出版したものであったという。従つて、維新派側には或いは會全體への親近感が存在していたのかもしれないが、今は明言を避けたい。
- (18) 江文漢「廣學會是怎样一箇機構」（『文史資料選輯』第四十三輯所收、五頁、中華人民政治協商會議全國委員會、文史資料研究委員會輯、中國文史出版社、一九八六年十二月）
- (19) 王樹槐「清季的廣學會」（『中國近代現代史論集 第十二編 戊戌變法』所收、三三—三八頁、中華文化復興運動推行委員會主編、臺灣商務印書館、一九八六年三月）
- (20) 梁啓超『戊戌政變記』第三篇第二章・政變之原因（『飲冰室專集』第三冊）中國之淫祠、向來最盛、…皇上於五月間下詔書、將天下淫祠悉改爲學堂、於是奸僧惡巫、咸懷忿怨、北京及各省之大寺、其僧人最有大力、厚於貨賄、能通權貴、於是交通內監、行浸潤之譖於西后、謂皇上已從西教、此亦激變之一小原因也。
- (21) 拙稿「戊戌變法運動の草創期における維新派と廣學會——維新派の發行した『（北京）萬國公報』を中心に——」（前出）を参照のこと。